

欧州から見た日本、そして中国

～プラスワン委員会によるセルビア大使館・ベルギー大使館訪問企画～

海外の空気に触れたい

コロナ禍で海外に出づらい状況が続いていました。しかし「国内でも海外体験ができないか？」——。そう考えたのがプラスワン委員会でした。メンバーの人脈を駆使して2カ国の大使館を訪問。11月のセルビア、そして2月のベルギーです。ともに東京開催でしたが、大阪から多数のメンバーが参加。会員の中にある海外志向の強さを感じました。

中欧の親日国

セルビアは「欧州の火薬庫」と呼ばれたバルカン半島の中心に位置します。旧ユーゴスラヴィア連邦の一員として戦火をくぐりました。その苦境にあった2000年代、日本からバスが寄贈されています。ベオグラード市内を走る93台の黄色いバスは通称ヤパナッツ（日本人）と呼ばれて、日本の経済援助のシンボルとなっています。親日国であり日本企業（大日本除虫菊株式会社、日本電産株式会社など）も進出しています。そして東日本大震災の時には、いち早くセルビアから多額の義援金が寄せられました。

大使館ではセルビアのワインと料理でもてなしていただきました。国際親善の素晴らしさを実感するひとときです。同時に、経済成長著しい中国の影を見ました。いま建設中のハンガリーへ向かう高速鉄道は、各国との競争の末に中国が受注しました。経済的にも技術的にも自信をつけた中国は欧州でも大きな存在感を示していました。「かつて東洋人を見れば『コンニチハ』だったが、いまは『ニイハオ』と声がかかる」——。そんな小話を聞きました。



列強のはざまを生き抜いたベルギー

ベルギーの首都ブリュッセルは、EU本部もあることから「EUの首都」ともいわれています。ここでも中国の存在を感じるだろうか。そう身構えていたところ、印象に残ったのはむしろ日本でした。

大使館の若手職員はベルギー本国で日本語を専攻し、関西大学への留学経験を持っていました。彼の在学当時、ベルギーの大学（外国語専攻）では中国語よりも日本語の方が人気で、学生数も2倍以上の差があったようです。「いまは？」と聞いてみると、微妙な表情を見せました。これからも海外の方に日本語を学び続けてもらいたいものです。

ベルギー大使館で考えたのは明治期の日本のことでした。岩倉具視の欧州使節団（1871-73）はベルギーも訪れています。英独仏蘭という大国のはざまで、なぜベルギーは存在しえたのか。欧米列強のアジア進出に危機感を覚えた明治日本は、そのヒントを探しました。ベルギーが生き残った秘訣（ひけつ）は「ものづくり」でした。豊富な石炭を背景に鉄鋼業が栄え、機械分野など製造業に強かった。それを参考に国づくりをしたのが明治政府でした。

もう一つ印象的だったのがベルギー人の国際感覚です。英独仏蘭などさまざまな国の言語を自由に話すというような柔軟性と国際的な視野の広さがベルギー人の強みでした。

岩倉使節団から150年。いまの日本も転換期です。経済大国ともてはやされたのは過去のこと。ベルギーの在り方からたくさんことを学びました。



コロナ禍での模索

2件の欧州の大使館訪問。そこから日本の置かれた現実を考えさせられました。そして欧州から日本や中国を俯瞰（ふかん）的に見る意義も知りました。

また今回の2件の訪問では、東京中小企業家同友会「国際ビジネス支援部会」とご縁ができました。中小企業の国際化をめざして活動続ける歴史ある部会です。二度のイベントで彼らとご一緒し、新たな交流ができたことも収穫でした。

コロナ禍の状況下でも「できること」を模索したプラスワン委員会。環境の変化に対応し、新たな視点をもたらしてくれたことに感謝しています。

文：日中経済交流研究会 広報委員会
坂元鋼材(株) 坂元正三